



● 核融合科学研究会ニュース 35 ●



CONTENTS

核融合科学研究会
平成19年度評議員会・総会
開催される 2

核融合科学研究会
平成19年度特別講演会
「南極から地球が見える」
講師 朝日新聞社会部記者
中山由美氏 2



核融合科学研究会会長の交代 4

事務局だより・編集後記 4

核融合科学研究所 平成19年度評議員会・総会開催される

核融合科学研究所の評議員会ならびに総会が、平成19年5月31日（木）土岐市のセラミックパーク MINO において、河津譽四男会長（当時 中部電力株式会社顧問）をはじめとして、会員各社、顧問の先生、及び来賓を御招きして、35名の出席のもとに開催されました。

まず、河津会長が挨拶を述べられた後、河津会長のもとに議事が進行されました。

はじめに第1号議案の平成18年度事業報告および決算報告について、小森彰夫運営委員長（核融合科学研究所）より詳細な説明があり、その後、日本ガイシ株式会社取締役専務執行役員本部長 浜本英嗣氏より監査結果の報告がなされ、了承されました。事業報告の中で小森運営委員長は例年同様、核融合科学研究所講演会、見学会を開催したこと、研究所主催の国際土岐コンファレンスの支援を実施したこと、また、総合研究大学院大学の核融合専攻の学生や特別研究学生に対し、奨学金や研究連絡打合せ旅費の援助を実施したこと。核融合科学研究所が全国レベルで実施した核融合科学研究所の一般公開（平成18年7月27日）にかかる費用の一部に関して助成を行ったこと等が報告され、承認されました。

② 続いて、小森運営委員長より、第2号議案の説明がありました。

第2号議案は平成19年度事業計画および収支予算についてですが、例年通り、核融合科学研究所主催の講演会や見学会を企画、実施すること、また、例年通り、核融合科学研究所主催の国際土岐コンファレンスを支援すること等、核融合科学研究所の一般公開を昨年同様支援することなどについての提案がされ、了承されました。

続く第3号議案では、会員企業の異動に伴う評議員の交

代等により、評議員の一部交代についての案が事務局より提案され、新評議員が了承されました。その後、中部電力（株）の人事異動にともなう新会長の選出にうつり、後任会長について、評議員より提案があり、新会長として、中部電力株式会社 取締役専務執行役員 技術開発本部長 田中孝明氏に就任をお願いすることが、満場一致で承認されました。

議事終了後、本島修顧問（核融合科学研究所長）より、研究所の活動状況について説明がありました。大型ヘリカル装置（LHD）についての報告を中心に研究所の現況について報告があり、会員の関心は非常に高く、熱心に説明に聞き入っていました。

引き続き、特別講演会が開催されました。講師には報道記者としてはじめて女性で南極地域観測隊に同行した朝日新聞社会部記者 中山由美氏を迎え、「南極から地球が見える」と題し講演いただき好評を博しました（講演内容については、別掲をご参照ください）。

特別講演会終了後、総会出席者の他に土岐市役所、核融合科学研究所の職員、その他関係者なども集い、懇親会が開催されました。会場には大型ヘリカル装置等に関するパネルなどが展示され、会員が研究所員に質問するなど、相互の交流が図られ、盛会のうちに終了しました。

核融合科学研究所 平成19年度特別講演会 「南極から地球が見える」

講師 朝日新聞社会部記者 中山由美氏

核融合科学研究所では、平成19年5月31日（木）平成19年度総会・評議員会のあと、朝日新聞社会部記者中山由美氏を迎えて特別講演会を開催いたしました。

中山氏は、1993年朝日新聞社入社。青森支局、つくば支局、外報部を経て、現職。外報部時代には、2001年9月11日の同時多発テロ実行犯の生涯を追って、ドイツや中東を取材。長期連載「テロリストの軌跡」（2002年度新聞協会賞受賞。単行本は草思社）の担当者のひとりです。

2003年11月～2005年3月、第45次南極地域観測隊に同行し話題となりました（報道記者としては女性初。またドームふじ滞在も女性初）。

今回の特別講演会では、「南極から地球が見える」と題し貴重なお話を伺うことが出来ました。以下講演内容を紹介します。

今は、ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリア、いたるところに海外旅行、あるいは出張に出かけて行く御時世である。飛行機では、もうロシアはいったから今度はウクライナなどという声も聞こえてくる。とはいってもさすがに

探検家でもなければ南極に行ったことのある人に出会う機会はまれであろう。今回の講演は460日間の南極体験をした朝日新聞社会部の女性記者、中山由美さんの話である。

南極は日本の国土の37倍の広さをもつ大陸でありどこの

国にも属さない。日の沈まない夏、日が昇ることのない冬、マイナス70度の雪と氷の世界、秘境である。ところで、南極点に最初に到達したのはアムンゼン。1911年11月の事である。その一ヶ月後、スコットも南極点に到達した。アムンゼンが犬ぞりを使ったのに対してスコットは馬を使った。途中、馬が寒さに耐えかね動かなくなる。そのため疲労困憊し全員遭難の悲劇に終わる。同時期に日本人もこのレースに参加していた。白瀬中尉である。残念ながら南極点到達の目的は達成されず帰らぬ人となったが、彼の志は、現在の我が国の南極観測として生きている。

1957年の国際地球観測年に際し、南極北極観測のブームが起きる。戦後十年、経済復興もそこそこに国家的に盛り上がり観測が始まった。朝日新聞が仕掛人であった事もあって第一次隊には朝日新聞関係者17人が乗り込んでいる。第3次越冬隊では、2次隊が残した15匹のうち、太郎次郎の2匹の生存が確認され世界的なニュースとなった。映画「南極物語」として話題になったので記憶に残っている方も大勢おられると思う。南極にまつわるドラマには事欠かない。

さて、月日は流れて中山さんは2003年45次隊に同行した。南極についたのは夏。最初に思ったことは、「ここは火星?」、イメージとのギャップでいささか幻滅したそうである。夏には氷が溶け赤茶けた岩盤がむき出し、工事現場の様相を呈していたとのこと。最初にした仕事は冬に備えての準備、この年のメイン工事は日本への通信アンテナだったそうである。おかげでインターネット開通、電話代も安くなり、TV会議もでき大量のデータも素早く送れて能率は上がった。今ではそれなりに快適な暮らしができるようになっている?

ところで夏の昼間にはペンギン、アザラシなど動物がやってきて、南極特有の現象、ダイヤモンドダストによる太陽の蜃気楼の幻日がみられ楽しいのだが、冬は大変である。まったく孤立する。氷に阻まれ誰もやって来なくなる。ブリザードがくれば周りは真っ白何も見えず、基地の目の前で迷子になる。基地の20m先で遭難された方もいるそうである。ただ、冬にもそれなりの楽しみはあるそうで、夜が長い分オーロラがよく見える。なんといっても困るのは野菜など新鮮なもの。おいしい物は食べられるが、基地で栽培した一本のキュウリを84枚にスライスして一人2枚ずつ食べたこともあるとのこと。ところで夏に南極に行って越冬しない場合、専門用語で「日帰り」というのだそうである。日が沈まないのだから言い得て妙である。太陽が再び昇るまでを一日というのなら南極の一年は何日なのか。

では、どうしてそんな苦勞をしてまで何のためにわざわざ南極まででかけていくのか? オゾン層、宇宙線、二酸化炭素、調べるものは山ほどある。南極には「宇宙ジン」もやって来るそうである。ここで「ジン」は「人」ではなく「塵」である。今話題の地球温暖化、気球を上げて二酸



化炭素やオゾン層の様子を調べたりもする。南極にはもちろん工場などはない。だから地球全体としてみた二酸化炭素の量の指標を得るのに適している。南極での調査から、二酸化炭素は確実に増えていることがわかる。オゾンの量も調べている。イギリスの報道が有名になったが、最初にオゾンホールを発見したのは日本のチームであるとのこと。

また、南極にいれば太古の地球の他宇宙のこともよくわかる。地球が生後間もない頃の、太古の昔40億年前の岩石が出てくる。この岩石を調べてみるとインド・パキスタンのあたりと同様な成分を含み、この地点はインドあたりとくっついていたことがわかるのだそうである。滞在中、中山さんは昭和基地より1000km離れた基地ドームフジに移動した。氷の上では一日10kmくらいしか進めない、行程は約一ヶ月、大変な旅だったそうである。なんのために更なる秘境を求めるのか? 答えは、氷を掘るために。なぜならば、氷には時代時代の空気、土、チリ、いろいろな物が閉じ込められている。いわば地球のタイムカプセルであり、深いところにはより古い時代が刻まれている。それで、なるべく高く氷の堆積しているところを選んで氷を掘削する。その場所がドームフジである。ドームフジの水を岩盤のところまで掘るとだいたい75万年前のことがわかるのだそうである。

講演を終えて、中山さんは南極にいて地球環境を考えるとようになったと語っている。都会にいれば、空さえも見えないところがある。一方、南極ではまわりには自然しかない。すべて自分たちでやらなければ生活は成り立たない。普段蛇口をひねれば出てくる水も、自分たちで溶かして作る。普段は気につけない事について改めて考える機会が与えられる。最近の気象、長い地球の歴史の中で繰り返される変動にすぎないという説もあるけれど、「やはり変だ」と個人的に感じる。CO₂削減とは叫べども、毎日の利便さには代え難いと思うのも人である。自然深くにあって安らぎと畏れを抱き、生死を想うのが人ではないだろうか。雪と氷の白銀の世界からのメッセージに心を澄ます時が来ているのかもしれない。

(文責: 核融合科学研究所 藤澤彰英)

核融合科学研究会会長の交代

核融合科学研究会では、平成19年5月31日に開催された評議員会により会長の交代がございましたのでお知らせいたします。



新会長 田中 孝明（たなか たかあき）

役職 中部電力株式会社 取締役 専務執行役員 技術開発本部長

略 歴 1972年 名古屋大学工学部 電気工学科 卒業

同年 中部電力株式会社 入社

2001年 同社 支配人長野支店長

2003年 同社 取締役 人材開発センター所長

2004年 同社 取締役 静岡支店長

2005年 同社 取締役 執行役員 静岡支店長兼流通本部長

2006年 同社 常務取締役 執行役員 技術開発本部長

2007年 同社 取締役専務 執行役員 技術開発本部長

現在に至る

前会長 河津 譽四男（かわづ よしお）

役職 株式会社中電シーティーアイ 代表取締役社長

4

事務局だより

＊ ＊核融合科学研究所オープンキャンパスのお知らせ＊ ＊

核融合科学研究所では、11月10日（土）、一般公開（オープンキャンパス）を実施いたします。

1日所長にギネス認定の500万個の星を投影できるプラネタリウム開発で有名になった大平貴之さんをお迎えし、ご講演いただいたり、その他楽しい催しをたくさん企画しております。

詳しくは、<http://www.nifs.ac.jp/welcome/2007/index.html> をご覧ください。

編集後記

平素は、核融合科学研究会の活動に格別のご高配を賜りまして、ありがとうございます。

当研究会といたしましても、新会長の下、これまで以上に事業内容を充実させ、会員の皆様にとって有意義な研究会でありつづけるように努力してまいりたいと考えております。ご意見などございましたら、気軽にご意見ご感想など、お寄せください。今後とも、当研究会ならびに核融合科学研究所へのご一層のご理解ご支援をよろしくお願い申し上げます。

核融合科学研究会ニュース
第35号（2007年10月）

融 會

編集・発行
核 融 合 科 学 研 究 会

〒509-5292 岐阜県土岐市下石町322-6

TEL 0572-58-0622 / FAX 0572-58-0626

E-mail : yu-kwai@tcp-ip.or.jp

URL : <http://www.nifs.ac.jp/yu-kwai/index.html>